

日系ブラジル人と地域社会

坪田典子

一 はじめに

地域社会における日常生活や小中学校等の現場あるいは職場に外国から来た人たちとその子供たちが私たちの隣人として生活している。一九八〇年代後半から外国人登録者数の急増現象がみられ、特に一九〇〇年以降日系の人たちの新規入国者数が全国規模で増加してきている。急激な外国人登録者数の増加は、日本側の要因としては円高と日本経済の進展、産業構造の変化等によるいわゆる単純労働力不足による。

広島県でも全国の傾向と同じく一九九〇年の改正出入国管理法施行後、外国人登録者数が急増している。広島県の場合は、近年の景気の低迷で一時より若干外国人登録者数が減ってきてはいるが、一定の割合を地域社会で保ちつつある(図1、2)。

急激な外国人登録者数の増加は、南米から日系の人たち、特に日系ブラジル人^①の増加によっている。



図1 広島県における外国人登録者数の推移

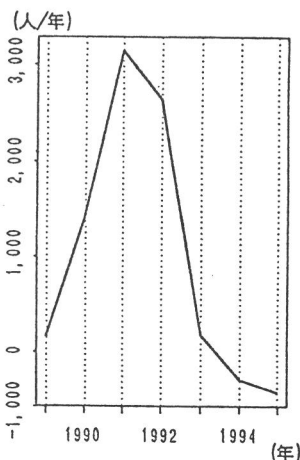


図2 広島県における外国人登録者の年間増加数の推移

法務省「出入国管理統計年報」により作成。各年とも12月末日現在の登録者数を示す。ただし、1995年のみ6月末日現在で広島県企画振興部地方課の資料による。

前年との差を図1より求めて図示した。

日系ブラジル人の増加は、ひとつには、改正出入国管理法が、活動に制限のない在留資格を日系の人たちのみ認めたこと、そしてそれにより日系三世までが熟練労働以外の仕事（いわゆる単純労働）に合法的に就くことができるようになったことによる。今ひとつは、ブラジルが最大の日系人口を有するという日本の過去の移民の歴史と関連している。移民に関して広島県は日本一の移民送り出し県であった⁽²⁾

日本は過去において、貧しい経済、有り余る人口を抱えた時代には出稼ぎ労働者として、移民として外国に夥しい数の日本人を送り出していたのである。ブラジルもその一つで、初めてのブラジルへの移民送り出しから九〇年近い歳月がたっている。ブラジルは日本人移民の定着率が最も高い国であり、現在ブラジルの日本人移民およびその子孫は、一二〇〜一五〇万人といわれており世界の中で最も日系の多いところとして知られている。

日本は出稼ぎや移民という形で日本人を外国へ送り出しただけでなく、労働力を補うために安い労働力として外国人労働者を受け入れていたという過去の歴史を持っている。今日の日本の外国人出稼ぎ労働者の現象を考えると、過去において同じような形で、日本が外国から出稼ぎ労働者を受け入れており、また外国に出稼ぎ労働

者、移民として日本人を送り出しているという歴史を抜きにして現在の外国人出稼ぎ現象を語ることはできない。そして日系の場合は、その子孫にあたる人たちの日本のUターン現象であるという文脈の中で語っていかないと何も見えてこない。

筆者は昨年広島県下の日系ブラジル人に生活史法による聞き取り調査を行った居住地域は、深安郡神辺町、安芸郡海田町、広島市、福山市、東広島市、廿日市市である。これらの地域における外国人登録者数の全住民に対する割合は表1の通りである。なお全国レベルの割合は約1%である。

本稿では、筆者の聞き取り調査から得られた知見をもとに日系ブラジル人が地域社会で自らをどのように位置

表1 広島県市町村の外国人登録者数の割合

市町村名	割合(%)
神辺町	0.6
海田町	2.0
廿日市市	0.6
東広島市	1.7
福山市	0.7
広島市	1.3
広島県	0.9

1995年11月末現在，広島県のみ6月末現在。県および市町村の住民台帳と外国人登録者数より作成。

づけながら生きていつているかを、エスニック・アイデンティティ⁽⁴⁾を切り口としてみていき、次に地域社会の現場における日本人側の接触の仕方の具体例を提示する。

新来外国人問題を考えるにあたっては以下のようない理由から日系ブラジル人を調査対象者とした。先ず第一に、改正出入国管理法における日系に対する特別処置⁽⁵⁾である。このことは日系を日本人により近い存在と見なしているということであり、それ故日本人側の対処の仕方が他の在住外国人の場合に普遍化できると考えられる。次に日系は移民として送り出した人たちの子孫のUターン現象であることから、他の在住外国人と比べて日系のエスニック・アイデンティティのあり方に日本社会が重複的に絡んでくると考えられる。

日系の中から日系ブラジル人にしたのは、改正出入国管理法施行後の主要メンバーがブラジルから来ているということ。また日系であっても移民として渡った歴史的経緯、ホスト国の今日の状況やホスト国との関わりの特徴等生まれ育った社会の違いによりエスニック・アイデンティティ形成に及ぼす影響が異なってくると考えられるからである。

二 地域社会と日系ブラジル人

(1) 「私はなにじん？」

ここでエスニック・アイデンティティというのは、国家の枠とは別に、自らが自分自身を何人だと規定しているかということの意味するものとする。すなわち、それぞれの地域社会で生活している日系ブラジル人が自らの考えにおいて自分自身をブラジル人だと思っているか／いないか、日本人だと思っているか／いないか、日系だと思っているか／いないか、あるいはほかの別個のものだと思っているか／いないかという自己認識を指している。日系ブラジル人は現実には日系ブラジル人という社会集団を構成しているが、このことと自分自身をどう認識しているかということとは別個のことである。

日本の中の多数派である日本人にとって、自分は何人かということを意識して生活することはほとんどない。しかしながら、その国で少数者の立場におかれた人たちにとって自分は何者なのかという思いは日常性と切り離せないものである。

日系ブラジル人という言い方は、字義通りには日本にルーツを持っているブラジル国籍を有する人という意味であるが、ここでは移民としてブラジルに行きブラジル国籍を取得していない一世の人たちをも含めたより広い

概念として、生活基盤のあったブラジルから日本に来て生活している人という意味で使用することにする。日系ブラジル人という言い方はブラジルでは使用されていないが、ここでは便宜上、彼／彼女らを日系ブラジル人と呼ぶことにする。

ブラジルは多くの国から来た移民で成り立っている多民族社会である。その中で日系の人たちはポルトガル系、イタリア系、アフリカ系、アジア系等々無数にあるルーツのひとつに過ぎない。そのような社会で彼／彼女らは特別な存在ではない。ごく普通にいろんなルーツの人たちと共存しているのである。ブラジル社会の中で、ブラジル人としての意識を強く持っている人もいれば、日本人としての意識を強く持っている人もいるし、このような意識とは関係なく生きている人もいる。

そのような彼／彼女らが日本に来て最初に出会うのが、「ブラジル人なのにどうして日本人の顔?」、「日本人の顔しているのにどうして日本語が話せない?」といったたぐいの質問である。そして、ある時は「日本人として」、別なときは「ブラジル人として」、また他の時は「日系ブラジル人として」行動することを要求される。

これらは日系ブラジル人にとって今まで当然であったことが当然でなくなる瞬間である。ごく自然に当たり前

の自分として生きてきたことに対して思いもよらない質問を投げかけられる。多民族社会であるブラジルでは当然であったことが日本では当然でなくなる瞬間である。

そのとき、自分はいったい何者だろうという大きな疑問が日系ブラジル人の中に生じる。質問に答えるため、要求に対処するために「なぜか?」と自問する。そこにエスニック・アイデンティティが浮上し、混乱をきたす。ブラジル社会では誰も取り立てて疑問に思わなかったことである。誰からも質問を受けなかったことである。それが、日本社会では、必ずと言っていいほど同じ質問に晒され、要求され続ける。人はいろんな種類のアイデンティティ⁽⁶⁾から自己を形成している。その自己形成は長い時間をかけてなされるものであるのに、このような状況に置かれた日系ブラジル人は、急いで短時間のうちに答えを見つけようとする。

「自分は何者だろう?」という自分自身への問いかけに対して自分なりの答えを見いだせない状態、迷いの状態におかれている時、内面は最も激しい葛藤状態に陥る人はアイデンティティに混乱をきたしたとき、自己に向き合いアイデンティティの再構築に向けて模索する。このような状態から抜け出ることができないまま傷ついて失意のうちに帰国する人たちもいれば、自分なりの答え

を見いだして生活している人たちもいる。ここでは後者の人たちに焦点を当て、葛藤の後、どのようにエスニック・アイデンティティを再構築して地域社会で生活しているかを見ていく。

(2) 日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティ状況

日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティ再構築の状態を筆者が行った調査分析をもとに図式化したのが図3である。縦軸に日本人の価値理念、考え方、感じ方や日本社会の社会制度とか生活様式等を含めた広い意味で日本の「文化」への関わり方の度合いをとる。すなわち、日系ブラジル人が日本人として自らを積極的に認識しているかどうかである。ここで「文化」という言葉を使用したのが今後「文化」という言葉を使用するときは、今述べたように広い意味での文化を意味することとする。横軸には、反対にブラジル人の価値理念、考え方、感じ方やブラジル社会の社会制度とか生活様式を含めた広い意味でブラジルの「文化」への関わり方の度合いをとる。すなわち、日系ブラジル人がブラジル人として自らを積極的に認識しているかどうかである。

そうすると日系ブラジル人の生き方の選択においてエ

スニック・アイデンティティのあり方として四つの型がとり出せる。四つの型がとり出せるということは、アイデンティティの再構築を行っている個々の日系ブラジル人が四つの類型のどれかに当てはまるということであり、日系ブラジル人を集団レベルで見した場合四つの類型に分かれるということである。

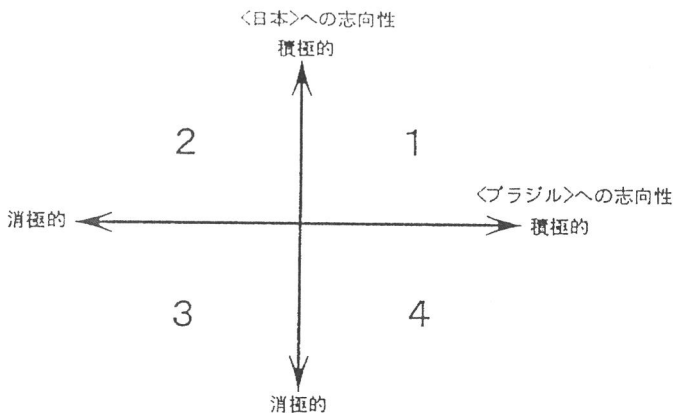


図3 日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティ

第一の型は以前から持っていた日本人意識を日本で否定させられた後にブラジル人意識に目覚め、ブラジル人という認識の下に日本人としての自己を内包させているタイプである。第二の型は以前から持っていた日本人意識を保持しているタイプである。第三の型は日本人とかブラジル人といった意識からは距離を置き、エスニック・アイデンティティに拘束されない生き方を志向するタイプである。第四の型は以前から持っていたブラジル人意識を保持しているタイプである。

先ず第一の型は、ブラジルで日本への心理的距離を近く持ち自らを日本人だと思っていた人たちである。この型の人たちにとって、日本はただの国ではなく両親、祖父母の国であるという熱い想いに支配された国である。それは過酷な移民の歴史を通して培われていった両親（祖父母）の世代の日本に対する愛惜の情がブラジルの地にあつて次世代へと受け継がれていったからである。次の引用は日本人側の偏見や差別的態度に傷つきながらも日本を見捨ててしまうことのできなかつた日系ブラジル人の体験である。

「そのころは日本がすごくいやでたまらなかつた。日本人の顔を見るのもいやだった。ちょっと頭がおかしくなつて国「ブラジル」へ帰る人が結構い

る。「私は」まわりに友達とかがいたから続けられた。イヤならどうして帰らないのかとみんなに言われたが、日本と日本人を好きになつて理解できるようになつて帰りたいというのがあつた」(7)

(引用文の「」内は筆者による)

日系ブラジル人は、日系の親に育てられ日本的なものを受け継いでいる。日本に来るまではそれがほかのブラジル人とどこか違う自己として捉えられており、日本人としての自己を認識する基盤となっていた。その日本人意識が来日して日本人と接することによってぐらつき始める。

それは、自らの日本人意識を否定させられるほど強烈なものである。日本社会で日系ブラジル人の日本人意識が崩れる。崩れるからアイデンティティに混乱をきたし葛藤する。日本に対する想いを強く内面化しているが故に葛藤が激しい。自らの日本人性やそれに連なる日本と日本人を否定してしまうことができないから悩む。

自らの日本人性否定という強烈な葛藤の中で、ブラジルにいたときから感じていた日本人というアイデンティティとは別個の自己を認識するようになる。そして日本にあってブラジルでは顕在化することのなかつた「自分はブラジル人だ」という自己認識へと変化していく。日

本人と接触することによって今まで自覚することのなかったブラジル人としての自己に目覚めていくのである。

これは、ブラジルで抱いていた日本や日本人に対するイメージと来日してから実際に接した日本社会や日本人との間にあるギャップの大きさを物語っている。ブラジルで抱いていたイメージは、両親や祖父母がブラジル社会に認められるために日夜努力する過程で日本人の特性として、日本に対する想いの加わったものとして形成されていった種類のものである。それに日本の国の経済的成功に対する肯定的な評価とブラジル社会の日系の人たちに対する肯定的な評価も加わって、このイメージは多くのプラスの側面を持つ。

反対に来日後日本人と接触して得られたイメージは、日本人側の差別、偏見や不誠実、そこから起こる不信感、不満、嫌悪感等、それに日本の制度に組み込まれることによって生じる圧迫感、意志不通、無理解からくる疎外感、自己喪失感、焦燥感等々に彩られている。それは日本社会で日系ブラジル人がおかれている相対的な位置関係に起因しておこる。日本での経験は決してプラスイメージだけで形成されてはいない。むしろ多くのマイナスイメージを内包したものとして形成される。この日本で得られた日本人イメージと以前から持っていた日本人

イメージとのギャップが大きければ大きいほど葛藤も激しいといえる。

この型は量的に最も多いと考えられる。それは二重の民族性に規定されているという日系ブラジル人の特色からして最も妥当な選択であると考えられるからである。

筆者の調査結果もそれを裏付けている⁽⁸⁾。

第二の型は、ブラジルにいるときから日本的な価値観や生活態度を身につけ、それに沿って生きてきた人たちがブラジル社会と自分の持っている価値観との間に異質性を感じ、生まれ育ったブラジル社会に対してしっかりと溝を感じて生活してきた人たちである。例えば、人に迷惑をかけない、恥を知る⁽⁹⁾、上の者を敬うという礼儀は内面を律する重要な価値観として強く存在している。これらの価値観はある意味ではブラジルの価値観と対極をなすものである。ここまでは第一の型の人たちと共通点を持っている。

第一の型の人たちと異なっているのは、来日して日本人と接しても日本人性を否定させられることなく逆に日本人の中に自分たちが育んできた日本的な価値観に裏付けられたよい面を見ようとするとする。そして悪い面、例えば日本人の差別や偏見に対しては日本人が他の国に行っても同じだろうという考え方をする⁽¹⁰⁾。すなわち、日本の

悪い面に関しては相対化されている。

この型の日系ブラジル人は、現在の日本人が失い欠けているもの、あるいは失ってしまった古き良き時代の価値理念を持っている人たちであるともいえる。日本人の伝統的な価値観として尊ばれてきたが時代と共に失われつつあるものを保持している人たちである。それは日本社会がすでに失ってしまったものであったとしても、日本においては対立する価値観としてではなく価値あるものとして認められているので、ブラジルと比べて日本の方と同質性を感じ日本人としての自己を保持し続けていると考えられる。

現在の日本と時空間的に離れたブラジルの地で日本から移民として渡っていった人たちが、日本人として恥ずかしくないようにとの一心から、日本人としての誇りを確立し、それが後の世代に受け継がれていった。そのことは日本人としてのアイデンティティを確立すると同時に日本への紐帯を深めていった。このようにして芽生えたアイデンティティは、他の国からやってきたポルトガル人、イタリア人等に対するエスニック・アイデンティティとしての日本人意識であり、日本における日本人のものとは本質的に異なったものとして成立していった。

日本社会は日系ブラジル人に対しては、同質な存在と

して日本へと組み込むと同時に異質な存在として押し出す力が働くので、押し出す力が強いとき、この型の日系ブラジル人にとっても葛藤が生じる。

第三型は、日本人とかブラジル人、日系といった意識からあえて距離をとって、自分らしさや自己のあり方をこれらとは別個のもので表現しようとする。なぜなら日常の行動に対して、それを日本人である、ブラジル人である、日系であるというものにくっつけようとする力が日本の社会には大きく存在しているからである。

ブラジルのように多民族で成り立っている社会は、例えば何系のブラジル人という場面ではエスニック・アイデンティティが浮上してくるようにエスニック・アイデンティティは日常性と共に自然に存在している。

しかしながら日本の中では一般にエスニック・アイデンティティを捉える場所がほとんどないから、それがあるところ(例えば外国人との接触場面)では、日本人側のエスニック・アイデンティティに対する拘りとして前面に押し出されてくる。従って日本社会は必要以上にそれを浮上させる場所となり、日系ブラジル人にとってそれは思いもつかないところで、思いもつかない形で常要求されるようになる。

その結果、日本に来て日本人として、ブラジル人とし

て、日系としてという観点から物事を聞かれたとき、行動を要求されたとき、混乱に陥り自分は何者なのだろうかというエスニック・アイデンティティを急いで無理に作り上げようとする。

エスニック・アイデンティティが強く要求される環境の中で内面に及ぼす影響をこの型の日系ブラジル人は次のように述べている。

「自分らしきというものに、日本人だから、日系だから、ブラジル人だからというようなラベルを貼られたときにエスニック・アイデンティティはすごくマイナスに働いてきた。私が一番エスニック・アイデンティティで悩んだのは、自分らしきをなくされるとき」⁴³

このタイプに属する日系ブラジル人は、エスニック・アイデンティティを重圧と感じ、そこから脱して本来の自己を回復する手段として敢えてエスニック・アイデンティティから距離を置くという生き方を選択している。

それは、エスニック・アイデンティティが強調されて前面に押し出されやすい社会にあって、自分らしきを見失わないで自己を確立しようとするときの生き方である。自分というものがエスニック・アイデンティティの形で捉えられなくても自分は自分であるという認識に至って

おり自己の存在証明が多様なものでなされるということ、を自覚した結果選択された生き方である。

第四の型は、ブラジルにいるときからブラジル人と認識していた人たちである。ブラジルでは彼／彼女らは、日本人の顔をしていても全く違和感を感じないでブラジル人として普通に生活していた。ところが、日本では日本人の顔をしているので以前と同じようにブラジル人として見てもらえない。以前のように普通に暮らしてはいけない。

ブラジルでの成育過程で日本的なものに組みしないで生きてきた人が多い。このような人たちにとって二番目のタイプに属する日系ブラジル人は合わないと思えられている。それはこのタイプに属する人たちに日系の友人がブラジルではほとんどいなかったということからも伺える。日系ブラジル人はブラジルで成育しているという共通点があるにも関わらずである。まして育った文化環境の違う日本の日本人は、彼／彼女らにとって異質な存在である。それは日本人が彼／彼女らに接して異質性を感じるのと同じことである。そのような環境で彼／彼女らはどのように地域社会と対峙しているのだろうか。このタイプに属する日系ブラジル人の言葉を引用する。

「ブラジルにはいろんな国の文化があるから日本

の文化を使ってもO・Kでもここでは恐い。職場とブラジル人に対してではブラジルの文化の出し方が違う。職場の迷惑になるようなことはしたくない。外国人の顔じゃないから何で日本人がこんなことをするということになる職場に悪い。ちょっとだけ注意して。そうしたら慣れた。日本の文化をブラジルであまりつかわなくても入っていた。私の年ぐらいの友達といるとき私は本来の私になる」⁴⁴

日本で生きていくために必要な方法として、時と場所に応じて自分を変えている。また、別の日系ブラジル人J・K・T・Tは次のように語っている。

「私は廃品回収とか子供会とかぜんぜん知らなかった。子供が来てから「最初は仕事のため単身で来日し一年後に夫と子供が来日した」、いろんな人に聞いてやってきた。子供は小学校の一番最初のブラジル人だったので、仕事場の親たちに全部聞いて一人でやってきた。參觀日に学校へ行ったも誰が何しに来たという感じだった。それに向こう「ブラジル」になかったものがすごくあったから、どうしてこんなにしないといけんと思っ
た」⁴⁵

子供が地元の学校に、地域社会に適応するために、自分達にとっては全く異質なやり方を、どうして?と思いつながら受け入れていっている姿を見て取る事ができる。実際彼女はブラジル国籍の子供たちが多勢生活する地域社会にあつて子供会や町内会とブラジル側の保護者との間に立って、日本語ができるということもあつて双方の意志疎通のために、またブラジルの子供たちが地域側に受け入れられるように、奔走してきた。日本の地域社会で生活しているのだから日本のやり方が理解できなくとも、疑問を感じていてもブラジル側が違いを認め受け入れるようにと奔走してきた。

(3) 現場での取り組みー共存関係の可能性ー

日本側とブラジル側の間に立って共通理解が得られるように努力してきた前述の日系ブラジル人J・K・T・Tのいる地域では学校側もこの問題に積極的に取り組み、当時の学校長が南米からの子供たちの増加を予想して前もって善後策を立て日本語専任のS教諭等と学校全体で取り組んできた。

広島県東部の南米国籍の子どもたちが在籍している小学校のF校長先生がその学校に赴任したときのことである。当時六名の南米国籍の児童がいた。外国籍の子ども

が二十人を越えたら異質排除の力が働くと思って、起こる前に手だてをしておこうという発想から具体的に取り組みを始めた¹⁰⁾。

地域の人たちや児童の保護者に対しては、外国の子どもが入ってくることによって学力の水準が下がるという捉え方をされることを警戒して、よい点を具体的にわかかって貰うために学区の全戸配布の新聞に国際理解特集を取り組んで記事にしたりして理解を求めた。外国の子どもによって在籍児童が得難い体験をしているとか、日本の子どもたちが言葉やいろんな国への関心を強く持つようになったとか、子どもの入学式に感激したブラジルのお母さんの話とか、外国籍の子どもたちが日本の子どもたちにどうプラスに働いているか等々プラス面を強調して伝えるようにした。また、日本の子どもたちの変化の様子を扱ったアンケート調査の結果¹¹⁾を報告している。

外国籍の子どもの保護者に対しては、先ず配布文書にルビをふって配布し始めたがルビでは保護者に伝わらなかった。そこで次に保護者会を開いてみることにした¹²⁾。ブラジルの人たちとの保護者会は本音の世界で、厳しい指摘が相次いだ。子どもたちの受け入れに関して学校長をはじめ全職員が一生懸命にやっているという自負が

あったが保護者会でのブラジル人側の思いもよらない厳しい指摘に、これからやっていたいけるのだろうかと不安で自信がなかった。が、やるだけのことはやろうとF校長と日本語担当のS教諭を中心に試行錯誤で取り組んでいった。

内容は、生活習慣、とりわけ学校、通学、生活の中の習慣の違いから起こることが多かった。例えば、集団登校の上級生の指示がはじめと違っていた。保護者会でブラジルの保護者側から指摘されたことにすぐ答えが出せるかどうか自信がなかったが、学校側が取り組んでいくことによって日本人の子どもの側も少しはわかってくれた。このような双方の取り組みによって、保護者会は学校側の伝えたいことがより細かに伝わる場になっていった。

F校長の次のような言葉が印象的だった。「できることがあれば何か援助をといて気持ちで保護者会に臨んでいたが、僕らが異文化を、とてもいいものを学ばせて貰っている」¹³⁾。

外国籍の子どもたちに対しては、保護者会での要望を受けて現在当校ではブラジル出身の子どもたちにポルトガル語の母語教育が日系のT先生によって行われている。母語教育は子どもたちの第二言語である日本語の発達を

促進し、アイデンティティ形成に重要な役割を果たす⁹⁰。

この学校での取り組みは、外国籍の子どもたちがおかれていた社会的立場や文化的背景が異なっていることを考慮して学校や地域社会での受け入れに関して、違いがもたらす結果をあらかじめ想定して配慮したケースである。この取り組みが行われてきた背後には学校、地域社会といった日本人側と新しく入ってきたブラジル人側の双方に積極的に関わろうとし、共に理解していこうとする姿勢があり、その過程で双方の側に重要な役割を果たしたF校長、S教諭、日系のT先生、日系のJ・K・T・T等の存在がある。異文化が接触する場面においてこのような役割を果たす人たちの存在は特に重要である。

次に子どもの言語習得の観点から若干言及する。子どもたちにとって日本での生活は日本語の環境に浸るといふことを意味している。このことは二つの大きな問題がある。一つは母語に関して、このような環境におかれた子どもは母語を忘れてしまい家庭でのコミュニケーションの断絶が起こる⁹¹。その結果「文化」の伝達が途絶え子どもは自らのルーツに疑問を持ちアイデンティティに苦しむようになる。その上将来は帰国する子どもたちにとって帰国後の問題がある。二つ目は日本語に関

してだが、日本語が話せ日常会話に不自由しないからといって学習日本語（教科学習に必要な認知活動に大きく関わる日本語）の能力が身に付いているとは限らないということである。これは日本人の子どもにも見られる学習上のつまずきと共通している。学習日本語能力が育たないと学習を進展させていくことが難しくなる。

子どもの中には言語的にもっとひどい状況におかれている子どももいる。最も問題なのは、日本語も母語もどちらも不十分な状態に置かれたままの子どもたちである⁹²。このことは将来の文盲に繋がり、これは当人の基本的人権に関わることもある⁹³。

日系の子どもたちのようにその社会で少数者の立場にある子どもにとって、日本という主流文化の中では自分たちの「文化」は主流文化に属する人たちから格差意識を持ってみられやすい。その結果、自分たちや自分たちの文化に対して否定的なイメージを抱きやすくなる。この否定的なイメージは自我形成はもちろんのこと言語習得にも悪影響を及ぼす⁹⁴。

三 おわりに

本稿は日系ブラジル人と彼／彼女らと関係を持つ人々に行った聞き取り調査に基づいて分析と解釈を加えたも

のである。少数者の立場に置かれた人々と多数派である日本人がどのようにして共存することができるか。多数派である日本人に求められているものは何なのか。

日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティに対する多様なあり方、例えば、日本人性否定／肯定、ブラジル人性否定／肯定、エスニック・アイデンティティからの距離といった葛藤や適応のあり方は日本人側の態度に対する日系ブラジル人の反応の仕方と捉えることができる。

人間は育ってきた環境で習得したパターンに沿って行動する。考え方、感じ方、行動の仕方のパターンは個人に固有のものであるが、同じ文化環境の中で生活してきた人たちは似たようなパターンを共有するようになる。この「文化」によるパターンは表面的なものとは違い、人間の根源的なものなので、短い期間で変えられるものではないし通常一生ついて回るものである。こここのところを認識することが大切である。

もともと人間は他と区別される特質を備えた存在である。違いがあるからこそ一人一人が個として尊重されなければならぬというのが、人類が歴史の中で到達することのできたひとつの尊厳理念である。違いを排除するのではなく違いの違いとして、人間が有する多様性とし

て互いに認めることが彼／彼女らとの共存の第一歩であるといえる。他者の有する異質なものをどの程度受け入れられることができるかでその人間の成熟度がわかり社会の成熟度が測られるのである。このような認識に立って初めて異文化の人との出会いの機会を生かすことができ、互いに人間として連帯し歩み寄ることができるとはいだろうか。

(注)

(1)日系ブラジル人の規定については、本稿二(1)参照。

(2)以下参照。「広島県国際交流課1995・131」

(3)筆者は2005年6～12月、広島県下の日系ブラジル人名と彼／彼女らと接触している日系以外のブラジル人及び日本人若干名に生活史法による聞き取り調査を行った。

(4)エスニック・アイデンティティの規定については、本稿二(1)参照。

(5)本稿一を参照。

(6)アイデンティティとは他者との相互作用を通じて形成されていくもので、自己同一性、いわゆる自分らしさである。この自己同一性に関わる社会的アイデンティティは、様々な社会的集団のメンバーとしてのアイデンティティや役割アイデンティティである。例えば、女性／男性／親／子ども／職業人／クリスチャン／日系としての

自「」等々。エスニック・アイデンティティは社会的アイデンティティの範疇にある。

(7) 日系ブラジル人 E・A (1995年12月15日)

(8) 調査結果では8名中2名がこの型に属していた。

(9) 日系ブラジル人からの聞き取りでは、人に迷惑をかけるというものは、夜遅くまで騒がないとかテレビ等大きな音を立てないこと等を意味し、恥を知るといふのは、例えば孫が強盗をすれば祖父母までが全部恥と感ずるといふ種類のことを意味している。日系ブラジル人 M・M・F・S・K・M・U・K・U 等への聞き取りから。

(10) 日系ブラジル人 K・U への聞き取りから。

(11) ブラジルの日本人移民のエスニック・アイデンティティの成立については以下参照。[前島 1984: 447-449]

(12) 例えば、本稿(1)参照。

(13) 日系ブラジル人 C・H (1995年11月6日)

(14) 日系ブラジル人 A・M・S (1995年10月18日)

(15) 日系ブラジル人 J・K・T・T (1995年11月10日)

(16) 学校側の取り組みは小学校の校長先生 Y・F への聞き取りから作成。なお、当小学校の1995年7月現在の児童数は426名である。

(17) アンケート調査結果及びその分析に関しては以下参照。

[神辺教育 1995: 156-161]

(18) 保護者会は当初日系ブラジル人 J・K・T・T の通訳によって始まり、その後ポルトガル語教師である日系ブラジル人 E・T の通訳により行われている。保護者に対しては保護者会の開催の他、一ヶ月に一度その月の予定と連絡事項をポルトガル語で配布している。

(19) 小学校の校長先生 Y・K (1995年12月14日)

(20) 母語維持の重要性については以下参照。[Cummins, J. & Swain, M. 1984: 80-96; 坪田 1995: 25-28] また、子どもの権利条約は子どもたちの文化的アイデンティティ保持のための母語・母文化教育への権利を保障している。子どもの権利条約第28条第1項(c)(d)、第30条参照。入国児童の学習権保障については以下参照。[野元 1994: 38-45]

(21) 筆者が参加した当小学校の日系ブラジル人保護者との保護者会での話し合いの中で何人かの保護者が実際に語っていた。

(22) 具体的報告は広島県下の小学校で日本語教師をしている K・T より。

(23) 非識字者の識字作文によって識字が人権とどのように関わるかについて朝倉が言及している。[朝倉 1990: 5-7]

(2) 母語・母文化に対する社会的イメージが低い場合は、子どもに親の言語と文化に自信と誇りを持たせるようにすることと同時に一般社会のイメージを人為的に高めることが必要となる。以下参照。〔中島 1991: 62-67 1992: 60-67〕

参考文献

- (1) 朝倉征夫 1990 「教育の国際化に関する考察—教育への権利と多文化教育を中心に—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要創刊号』早稲田大学教育学研究科: 3-16
- (2) Cummins, J. & Swain, M. 1986 *Bilingualism in Education* Longman
- (3) 広島県国際交流課 1995 『国際化関係資料』広島県
- (4) 法務省入国管理局編 1993 『出入国管理』大蔵省印刷局
- (5) 神辺教育 1995 『教育の道 研究紀要第24集』神辺町立神辺小学校
- (6) 前島隆 1984 「ブラジル日系人におけるエスニック・アイデンティティ」『民族学研究』48. 4: 444-458
- (7) 中島和子 1991 「何のためのバイリンガル教育か」『言語』8: 62-67 大修館

(8) 中島和子 1992 「バイリンガル児とアイデンティティの獲得」『言語』9: 60-67

(9) 永井憲一・寺脇隆夫 1990 『子どもの権利条約』日本評論社

(10) 野元弘幸 1994 「外国人労働者及びその子どもたちの学習権保障」『教育学研究』第6巻第3号: 38-45

(11) 坪田典子 1995 「児童日本語教育と社会問題」『児童日本語習得』『入国児童日本語教育ハンドブック』13-30 日本語教育学Ⅱ研究クラス

(12) 坪田典子 1996 『日系ブラジル人と日本社会—エスニック・アイデンティティを鍵概念として—』広島大学大学院日本語教育学科修士論文

図1 広島県における外国人登録者数の推移

法務省「出入国管理統計年報」により作成。各年とも2月末日現在の登録者数を示す。ただし、1995年のみ6月末日現在で広島県企画振興部地方課の資料による。

図2 広島県における外国人登録者の年間増加数の推移
前年との差を図1より求めて図示した。

図3 日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティ

表1 広島県市町村の外国人登録者数の割合